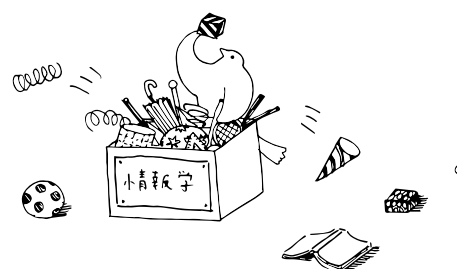


contents

[コラム]

情報学分野参照基準その後
…萩谷昌己

[解説]

新しいスキル標準体系を活用した人材育成
— i コンピテンシ・ディクショナリ（試用版）の公開—
…秋元裕和基
般 Column

情報学分野参照基準その後

情報学分野の参照基準は、2014年7月号の「情報処理」で報告したように、日本学術会議情報学委員会のもとにある情報科学技術教育分科会において、情報処理教育委員会の協力を得つつ、策定を進めている。

本参照基準については、さまざまな反応をいただいた。文理融合の学部の先生方や情報教育の関係者からは多くの励ましをいただく一方、理工系の学部学科の先生方からは文理に跨る情報学について懐疑的な意見もあった。以下では、特に重要な指摘について、現時点での筆者個人の考えも含めて報告しておきたい。

1つは認知科学の扱いである。現在策定中の原稿の「エ 情報を扱う人間と社会に関する理解」では、主として社会情報学の立場から、情報学を学ぶものが獲得すべき基本的な知識と理解をまとめている。これに対して、認知科学的な項目は、「オ 社会において情報を扱うシステムを構築し運用するための技術・制度・組織」のもとの Human Computer Interaction の中に「人間の認知特性」として含まれている。これは学術・技術コミュニティや大学教育の現状に則したものであるが、参照記述全体として認知科学の位置付けが不明確となっている。何を情報学に含めるべきか、再検討が必要であろう。この観点から、日本認知科学会に検討を依頼している。

データサイエンスの扱いも少し見直しが必要と考えられる。現在策定中の原稿では、「イ コンピュータで処理される機械情報の原理」の中の「各種の計算・アルゴリズム」として、「機械学習・データマイニング」が含まれている。たとえば、「情報の認識・分析」という項目のもとに明確に位置付けるのが適切ではないだろうか。

デザインや芸術に関連する項目がない、という指摘もあった。この指摘は非常に重要である。これらの分野を応用情報学と位置付けることもできるが、この方向の教育の重要性を鑑みると、固有の能力もしくはジェネリックスキルの中で具体化することも考えられるだろう。

「エ 情報を扱う人間と社会に関する理解」に関しては、具体的なカリキュラムの例が欲しいという意見があった。参照基準はカリキュラムを与えるものではないが、社会情報学については Computing Curricula のようなものがないので、カリキュラムのイメージを与えることは必要だろう。このことと関連して、社会情報学および「ア 情報一般の原理」については、情報学の系譜を19世紀終わりまで遡る必要があると思い始めている。

特に以上の点を含めて、今後、分科会および情報処理教育委員会にはさらなる検討をお願いしたいと考えている。

参考文献

1) 萩谷昌己：情報学を定義する—情報学分野の参照基準，情報処理，Vol.55, No.7, pp.734-743 (July 2014)。

萩谷昌己（東京大学）

ロゴデザイン ● 中田 恵 ページデザイン・イラスト ● 久野 未結